

IV 評価・分析

1 ルーブリック

年度当初の4月と年度末の2月に、全校生徒を対象にルーブリックによる探究活動の自己評価を行った。年度当初は、全ての項目において、C評価が50%以上、B評価が30%程度という評価であった。しかし、一年間の活動を通して、各項目においてC評価が大幅に減少し、B評価以上の評価がおおむね40%を超えるなど、成長が見られるようになった。また、各項目においてわずかではあるが熟達レベルであるS評価をつけている生徒もあり、リーダーシップを発揮することのできる生徒の増加が見られた。社会共創科の1年生は、地域理解・自己理解に多くの時間を充てているため、自分たちでプロジェクト学習を企画・実践する時間が多くなかったこともあり、4月、2月ともにやや低めの評価をしている生徒が他の学年に比べると多かった。普通科の2、3年生は、4月の時点でA評価を付ける生徒も見られるなど、これまでの積み重ねによる成長が見られた。外部人材との協働や探究活動を通して、生徒の力が伸長したことはもちろん、成功体験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を高めたことも影響しているのではないかと考えられる。

2 目標と実施状況

令和6年度 みさこ・せんたんプロジェクト ルーブリック

() R () 番 氏名 ()

学習成果		レベルC	レベルB	レベルA	レベルS	評価理由	
評価項目		初心者・初級者レベル ＜知識・理解＞	自立・学習者レベル ＜応用・分析＞	熟達・職人レベル ＜統合・普及＞			
地域活性化プロジェクトプランの計画	計画力	サポートを受けながら、プロジェクト全体の概要を理解している。	自分のプロジェクトに必要な情報を収集し、自ら計画を立てることができる。	自分のプロジェクトについて、現状や実現性を客観的に分析し、修正することができる。	自らが、成功する計画を立てるとともに、他者のプロジェクトについても的確なアドバイスをすることができる。	4月	自分の力だけでは何も行動に移すことができない。誰かに助けてもらわないと動けなかった。まだプロジェクトの全体の概要を把握しきれていなかった。(C)
		70%	30%	0%	0%	2月	自分で計画や進行などをすることができ、協力しながら進めることができた。プロジェクトの全体概要の理解を深め、発展的な内容にまで踏み込むことができた。(A)
	判断力	サポートを受けながら、自分の地域の特徴を理解している。	自分の地域の現状や課題について必要な情報を収集し、適切に判断できる。	情報を収集・分析するとともに、現状を踏まえ、プロジェクト達成のための判断を適切に行うことができる。	プロジェクト達成のために統合的な情報に基づき、全体的な立場で考察・判断することができる。	4月	そもそも自分の住む地域に興味・関心がなかった。他の人の意見の通りに行動することができず、自分の意見を表出することができていなかった。(C)
		67%	29%	4%	0%	2月	郷土芸能活動やゼミ活動など、伊方町のことを理解することができた。イベント等に参加した際にはこれまでの情報や経験と学びをすり合わせて判断できるようになった。(A)
		10%	50%	36%	5%		
地域活性化プロジェクトプランの実践	実践力	サポートを受けながら、プロジェクト達成のために自分がすべきことを理解している。	プロジェクトの目的と自分の役割を理解して、知識や経験を活用して自発的に行動している。	プロジェクトの状況を観察・分析し、目的の達成のために臨機応変に行動することができる。	プロジェクト全体を総合的に把握して、これまでの経験を生かしながら、リーダーとして活動することができる。	4月	自分から行動することが難しく、自分のやるべきことだけに精一杯だった。サポートを受けながらだったが、自分のすべきことを理解できておらず、行動に移せなかった。(C)
		68%	29%	3%	0%	2月	高校生記者活動を通して、これまでの経験を生かしながらリーダーとして周囲を引っ張ることができた。自分の役割以外にも周囲に気遣いながら全体を動かすことができた。(S)
	調整力	プロジェクトチームのメンバーには、様々な立場や意見があることを知っている。	多様な意見や立場の違いを認め、学び合うことで、意見をまとめるだけでなく、新たな考えを発見し深めることができる。	多様な意見や立場の違いを認め、学び合うことで、意見をまとめるだけでなく、新たな考えを発見し深めることができる。	幅広い年代の人や、自分とは異なる意見の人など、どのような人とも協働して活動することができる。	4月	それぞれの立場や意見があることは知っていたが、チームの方向性がそれぞれ違うとまとめることが難しく、周囲とぶつかることもあった。(C)
		59%	35%	7%	0%	2月	多世代交流活動や総合的な探究の時間などを通して、地域の方々と話す機会が増え、協働して活動することができた。互いの意見を言い合い、良い方向につなげることができた。(S)
		13%	38%	37%	13%		
プレゼンテーション	コミュニケーション力	プロジェクトの内容を理解し、相手に伝えることができる。	自分が伝えたいことを適切に伝えるための方法を学び、相手に伝えることができる。	相手や場に応じて、自分が伝えたいことを聞き手に効果的に伝えることができる。	単に情報を発信するだけでなく、他者を動かすことができるような情報発信をすることができる。	4月	自分に自信がなく、相手のことを考えず、伝えることで精いっぱいだった。伝えたいことを伝える努力をすることはできたが、質問をされたときに答えることができなかった。(C)
		67%	29%	4%	0%	2月	プレゼンテーションを活用し、相手に伝わりやすいように聞き手の立場を考えて発表することができた。相手が興味をそられるような話し方を工夫することができた。(A)
		13%	41%	36%	11%		

本事業の研究開発開始時に三つの目標を設定した。

一つ目に「生徒による3年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上度100%」という目標を設定した。本構想における地域の課題発見、解決に向けた、主体的・協働的な取組により、地域を担う人材としての資質・能力を身に付けることができたかを、成果物の作成や情報活用能力の向上等を通して評価するとともに、学習内容の確実な定着を図ることとしている。年度当初と年度末に行った生徒のルーブリック評価等の結果から、地域の方との協働や探究活動を通して、昨年度の70%を超える88%の生徒に、地域を担う人材としての資質・能力の向上が見られた。また、社会共創科1期生である1年生のうち、96%の生徒のコミュニケーション能力の向上が見られ、来年度以降の取組によって、さらに地域を担う人材へと成長すると考えられる。

二つ目に「大学等進学者のうち、地域創生関係の大学・学部等への進学者数50%」という目標を設定した。大学等に進学した後、多分野において得た知識や技能を生かし地域産業等に貢献することは、地域活性化のために必要不可欠であるため、高校での学習を通して、生徒の進路に対する意識の向上を図ることとしている。今年度は地域創生関係学部への進学者が1名に留まったが、大学等進学者16名のうち、69%の11名が、総合型選抜や学校推薦型選抜において、3年間

の地域探究活動の成果を生かして、合格を果たしたことから、取組の成果は見られた。また、大学等進学者の中には、大学卒業後に出身地等で教職などに就くことを考えている生徒もあり、3年間の地域探究活動を通して、郷土への愛着が高まった結果ではないかと分析している。高校3年間で活動を大学での学びにつなげ、地域創生関係の大学・学部等への進学者数を増やすためにも、令和7年度は探究活動の在り方等を再検討していく必要がある。現在、協働している大学等を含め、地域創生関係の学部を有する大学との連携など新たな取組方法を検討していきたい。

三つ目に「高等学校卒業後及び大学等卒業後の出身地への就職者数の割合 70%」という目標を設定した。高卒人材の就職は地域活性化に必要であり、大学等卒業後の「ブーメラン人材」は活力ある地域づくりに不可欠であるため、中期的な視点に立ち、地域を担う人材の育成を目指すこととしている。昨年度は就職者10名のうち、4名が出身地で就職したが、今年度は就職者10名のうち、5名が出身地での就職が内定している。目標達成に向けて、地域の方の「仕事」と「その人の生きざま」をインタビューしてまとめる「佐田岬お仕事図鑑」の制作を通して、人間関係形成力や課題解決能力の育成、自己理解の推進などのキャリア教育や、自ら問いを立て、その解決に向け情報を収集・整理・分析し、意見交換や協働を図る探究活動に取り組んだ。今後も生徒一人一人の興味・関心に合わせた、主体性を高める活動となるよう検討を重ねていきたい。これらの新たな取組を通して、変化の激しい社会に対応した新たなキャリア教育を推進していく必要があると感じた。

3 次年度以降の課題及び改善点

探究活動を軸とした教科横断型のカリキュラムや「未咲輝ゼミ」等によって、これまで以上に生徒たちは地域課題の解決に向け、学校の内外で活動を展開した。従来のイベント運営や商品開発に加え、今年度はデータ分析を用いた具体的な政策提言等を行い、校外のコンテストで優秀な成績を収めることができた。その一方で、探究活動を通じた自己有用感や自己肯定感の向上にはまだ課題があり、特に、自らの成長を言語化したり、成果を見える化したりする部分に関して、本校生徒は苦手意識を感じているようである。これらの課題を解決するために、教職員一人一人の生徒への声掛けを徹底すると同時に、外部の評価システム等の導入も検討したい。

来年度以降も適宜研修会を実施するとともに、コンソーシアムメンバーをはじめとした外部人材との密な連携や、校務支援システムの積極的な活用などを通して、教職員の資質向上・スキルアップに努め、充実した探究活動となるようサポートしていきたい。



V 資料



未咲輝学Ⅰ

佐田岬半島のくらし・文化・歴史・自然を知る

R 氏名

佐田岬半島（伊方町）



出典：佐田岬民俗ノート1より

序文

はじめに

三崎高校では、「未咲輝学（みさきがく）」という、独自の学校設定科目を設けています。みなさんの高校生活の舞台となる佐田岬半島を深く知り、地域の人々の話を聴いたり、ビッグデータを活用したりして、自分たちで課題を見つけ、解決策を導き出していくチカラを3年間かけて身に付けていく授業です。

「未咲輝学I」では、「地域理解」をテーマに掲げています。まずは佐田岬半島の地域について深く知ることからはじめましょう。

このワークブックは、佐田岬半島の自然、歴史、人々の暮らしについて、みなさんが理解を深めるためのきっかけをちりばめています。でも、実際には、ここには載せきれないほどたくさんの魅力と謎と課題に満ちています。

いつの日か、みなさんがそんな世界社会に立ち向かう勇気としなやかさを手に入れられるように、まずはこの本を手にも社会と向き合うレッスンを積んでいきましょう。

目次

佐田岬半島(伊方町)地図・・・・・・・・・・ 1

1	佐田岬灯台・・・・・・・・・・	3～6
2	三崎地区・・・・・・・・・・	7～9
3	三崎のアコウ・・・・・・・・・・	10
4	松地区・・・・・・・・・・	11～12
5	井野浦地区・・・・・・・・・・	13
6	名取地区・・・・・・・・・・	14
7	大江地区・・・・・・・・・・	15～16
8	塩成地区・・・・・・・・・・	17
9	亀ヶ池・・・・・・・・・・	18
10	二見地区（鳥津・大成）・・・・・・・・	19～20
11	佐田岬半島の地質・・・・・・・・	21～22

12	佐田岬半島の石垣たち・・・・・・・・	23～24
13	三崎精錬所跡・・・・・・・・・・	25～26
14	須賀の森(九軍神慰霊碑)・・・・・・・・	27～28
15	日本農業遺産・・・・・・・・・・	29
16	裂織り・・・・・・・・・・	30
17	くらし今昔・・・・・・・・・・	31～34
18	鯨塚・鯨地蔵・・・・・・・・・・	35～36
19	赤坂坊山の石塔群・・・・・・・・	37～41
20	動物のお地蔵さん・・・・・・・・	42
21	拓本・・・・・・・・・・	43～44

【資料】式墅截・・・・・・・・・・ 45

1 佐田岬灯台

- 日本の灯台50選(1998年)
- 「恋する灯台」認定(2016年)
- 国登録有形文化財(2017年)



豊予海峡

佐田岬半島は、長さ約40kmの「日本一細長い半島」である。先端の佐田岬から、大分・佐賀関の関崎までは、わずか13km。その間の豊予海峡は、瀬戸内海と外海をつなぐ海上交通の要衝だが、別名「速吸の瀬戸」と呼ばれ、その潮流は最大5.7ノット！航行する船にとって、大変な難所だった。

佐田岬灯台のおいたち —HISTORY—

近代に入り、外国船の来航や国内の海運業が盛んになる中で、各地に灯台が作られた。

豊予海峡には、1901年(明治34年)佐賀関に関崎灯台(鉄造)が建てられた。その後、豊後水道を行き交う船舶などから熱望され、1917年(大正6年)5月に起工。関崎灯台のレンズが移設され、翌1918年(大正7年)4月1日、佐田岬灯台に光が灯った。



航路標識番号：4967

国際航路標識番号：M5424

位 置：北緯33度20分35.0秒

東経132度00分53.7秒

初点灯：1918年(大正7年)4月1日

構 造：白色塔形(コンクリート造)

灯 質：群閃白光(20秒毎に3閃光)

光 度：実効光度25万cd(カンデラ)

光達距離：19海里(35km)

灯高(海面から光までの高さ)：49m

灯塔高(建物の高さ)：18m

メモ 🍌



1919-20ごろ撮影

佐田岬灯台を解剖する -DISSECTION-

※青焼図面『佐田岬燈臺新設設計圖』（部分・松山海上保安部蔵）より

水銀槽式回転機械

大きく重たいレンズを水銀のプールに浮かべてスムーズに回るようにする装置。

1986年(昭和61年)に、水銀を使わないベアリング式に変わった。

昔は、窓があったが、現在はふさがれている。

鉄筋コンクリート

日本の鉄筋コンクリート造(RC造)灯台は、1912年(明治45年)の清水灯台(静岡)が最初。1923年(大正12年)の関東大震災以降、建造例が急増した。

佐田岬灯台は、震災前の建設で、RC造の大型灯台としては、日本最古。

※レンズの等級と大型灯台

灯台のレンズは、大きさ(直径や焦点距離)によって、1等～6等に等級が分けられている。この内、1～3等のレンズを使用している灯台を「大型灯台」、それ以下を「中型灯台」「小型灯台」と呼ぶ。

佐田岬灯台は、第3等レンズを持つ大型灯台。

フレネルレンズ

佐田岬灯台のレンズは「第3等大型三面閃光レンズ」といい、直径150cm超のレンズが3つ連なった形をしている。

最初に関崎灯台から移設されたレンズは、フランス製だったが、戦災を受け、1950年(昭和25年)に日本製のものに付け替えられた。



※フレネルレンズ

フランスのフレネル氏が1822年に発明。

プリズムを組み合わせた軽くて薄い形状で、光を屈折させて直線的にそろえ、遠くから見てもレンズが正面に向けた時だけピカッと光るように作られている。



鉄製の階段

分銅筒

建設当初は、職員が十数時間毎にロープを巻いて、重い分銅を上げ、その分銅が重みでゆっくり降りる力を利用して、レンズを回転させていた。

1966年(昭和41年)、電動モーターに変わったが、かつて分銅を降ろしていた中空の芯柱「分銅筒」が残っている。



内部は、時計回りのらせん階段

佐田岬灯台のまわり -AROUND-

※佐田岬灯台の周辺は、1956年(昭和31年)に瀬戸内海国立公園に編入され、鳥や昆虫の渡り回廊としても有名。



佐田岬黄金簀照射灯



黄金簀は、佐田岬沖650m付近にある岩礁で、通航する船舶に危険なため、1950年(昭和25年)に黄金簀灯柱が設置された。しかし、保守作業が極めて困難かつ危険なため、1976年(昭和51年)に佐田岬灯台から黄金簀上3.4mの標柱を照射するようになった。

御籠島

大島とも呼ばれる。はるか昔、ここに野坂権現(現在の野坂神社)が鎮座していたとされ、今でも神社の土地。戦時中、洞窟式砲台が建設された。

豊予要塞

戦時中、豊予海峡を挟む愛媛・大分県沿岸を中心に「豊予要塞」が整備され、佐田岬周辺にも大正末期～昭和初期にかけて、砲台や監視所などが作られた。灯台下の断崖や御籠島には、終戦間際の1945年(昭和20年)に作られた洞窟式砲台跡がある。

三崎漁協の蓄養池

1967年(昭和42年)に建設され、佐田岬と御籠島が陸続きになった。

吏員退息所跡地

「官舎跡」とも呼ばれ、灯台で働く職員の住居があった場所。多い時は、ここで5世帯が生活しており、買い物や通学は徒歩だった。現在は、トイレも設置され、佐田岬灯台周辺散策の助けになっている。

椿山展望台

灯台写真撮影の定番スポット。戦時中は、周りに探照灯が設置されていた。

メモ

- Q.「三崎漁協の蓄養池」はなぜ作られた？
- Q.「黄金簀」にまつわる昔話(民話)とは？
- Q.佐田岬灯台近辺で見られる渡り鳥・昆虫の種類は？
- Q.佐田岬灯台が一番キレイな時間帯は？
- Q.佐田岬半島にある灯台の仲間たちは第何等レンズを持っている？

佐田岬半島にある灯台のなかまたち -LIGHTHOUSE FRIENDS-

※海に囲まれた佐田岬半島は、佐田岬灯台の他にも、様々な灯台のなかまたち(航路標識)があり、海を通じて世界とつながっています。



①佐田岬灯台



②見舞埼灯台



③三机港須賀
防波堤灯台



④襖鼻灯台



⑤佐田岬港
第一防波堤灯台



⑥伊予三崎港
三崎第一防波堤灯台



⑦伊予三崎港
井野浦第一防波堤灯台



⑧庄司太郎簀灯浮標
※写真提供：宇和島海上保安部



⑨女子鼻灯台



⑩室ノ鼻灯台

メモ 🖋️

2 三崎地区

三崎地区は、海拔20mライン内側のエリアが海岸から東に1km以上も続いている。この平坦な沖積平野の長さは、伊方町内では九町に次ぐものである。

国道沿いには、傾斜のほとんどない三崎大川が流れ、さらに北側山地から流入する河川によって扇状地が形成されている。

海岸沿いの浜堤(ひんてい)によって海拔10mラインの内側はラグーン(潟湖)となっていたことが、明らかになっている。

土居城趾や伝宗寺、庄屋屋敷など古い施設は、北西の20mエリア近辺に位置しており、海拔10mエリアの内側は、田が埋め立てられて住宅地や小中学校、保育所、支所など中枢をなす新しい施設が作られた。



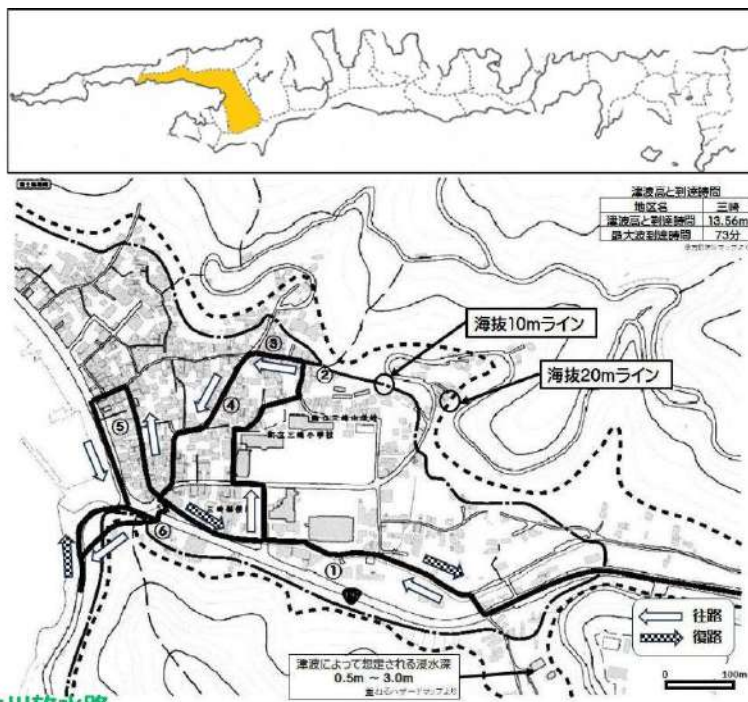
放水路

三崎大川放水路

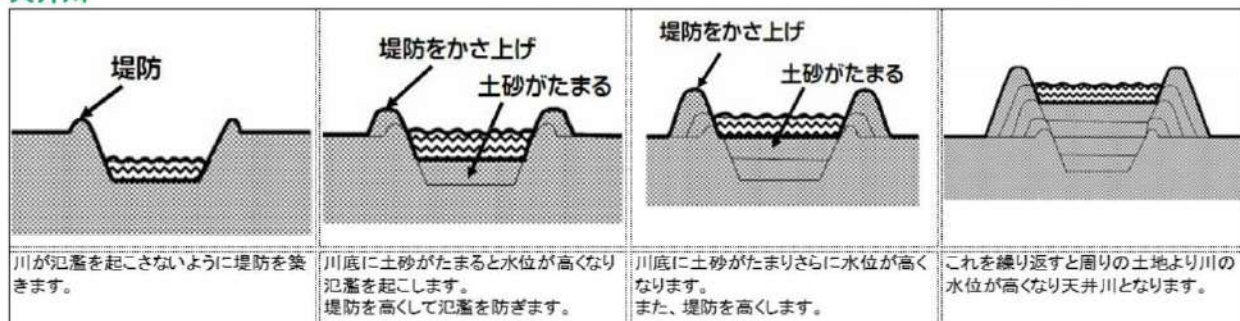
海拔10mライン内側のエリアは、江戸時代初期から広い田地となっていたが、人口が増えるにつれ生活環境も変化し、埋め立てられ宅地化や道路整備が行われてきた。

このエリア(沖積平野)には三崎大川をはじめ複数の河川が流れ込み、海岸沿いの浜堤によって排水が妨げられ、三崎地区は、度重なる浸水被害を被ってきた。

三崎地区の浸水被害を軽減するため、平成14年に三崎大川放水路(延長420m)を完成させた(竣工後、まだ一度も放水はしていない)。



天井川



浜堤とラグーン

三浜堤とは沿岸流で砂礫が海岸沿いにたまり、盛り上がった低い堆積物のことで、この浜堤によって三崎地区にはラグーンが形成され、川の上流から流れてきた土砂が堆積して沼地となった。

浜堤上の遺跡から出土した遺物などから、稲作が行われていたと考えられている。



弥生土器



子持勾玉

メモ

Q.天井川があると、どんなことが起こりやすい？

Q.伊方町内で見られる浜堤によってできた地形には、他にどんなものがある？

高神様(土居城趾)と宇都宮誠集碑

土居と呼ばれるこの一帯は、大久主馬範貞(おおくしゅめのりさだ)の館内に含まれ、本丸としての役割を持ち、伝宗寺から墓地台地にかけて広い館を築き、東端の小高い丘は見張場(櫓)だったと考えられる。

また、高神様の下隣に宇都宮誠集の碑がある。

三崎高校歌にも歌われる宇都宮誠集は、安政2(1855)年生まれで、明治23(1890)年に山口県萩市から夏柑の苗100本を取り寄せ、自分の農地に植え、この気候が栽培に適していることなどを熱心に村人たちに説明し、普及に努めた。その結果、柑橘の全国的産地としての名声を高めるなど、村の産業開発に貢献した。



高神様(土居城趾)



宇都宮誠集の碑

三崎八幡神社

三崎八幡神社は、貞観2(860)年の創建と伝えられている。

道路脇にある大きな鳥居は、右柱と左柱が違う時期に建てられており、右柱には明治25(1892)年、左柱には宝永3(1706)年という銘がある。



伝宗寺

臨済宗妙心寺派の寺院で、1652(承応元)年に開山された。現在の本堂は、1835(天保6)年に海から流れ着いた樺の木材で建てたとされている。建てた時に作る棟札という板に「竜宮餘材」とあって、海の中の竜宮城から建材を得たという伝説が残ってる。境内には、推定樹齢約1000年の2本の大クスノキがある。明治44(1911)年に書かれた『三崎村郷土誌』には「堂前ノ楠ハ本縣下ニ於テモ稀ニ見ルモノ、周囲二丈餘、高キコト天ヲ衝ク風景、亦望ムニ宜シ」とある。



Q.三崎八幡神社の鳥居は、なぜ右柱と左柱で建てられた時期が違うのか？



メモ 📝

3 三崎のアコウ

【アコウ樹について】

アコウは、クワ科でイチジクの仲間。

暖地の沿海地域に生息する常緑高木であり、日本では、紀伊半島・四国・九州・沖縄に分布。

無数の空中根(気根)が特徴で、タコの足に似ていることから「タコの木」とも呼ばれる。



【四国初の天然記念物】

三崎地区に自生するアコウ樹は、分布範囲の北限にあること・巨樹としてまとまっていることなどが学術的に評価され、1921(大正10)年3月3日

に「三崎村あこう樹」の名称で高知県土佐清水市にあこう自生地と共に国の天然記念物に指定された。この指定は、国内で2番目であり、四国では最も古いもの。1957(昭和32)年「三崎のアコウ」に名称変更された。

指定当時7本あったアコウだが、現存する巨木は4本。そのうち、最も大きいとされる樹は、高さ18m、周囲14mもある。

【アコウ樹のおもしろい特性】

気根(空中根)と呼ばれるもじゃもじゃした根を高い枝や幹から垂らしている。これらが地面につくと、地中に根をおろし地上部分が新たな樹幹となる。また幹の途中などに緑色の丸い粒のようなものが付くが、その中に花があり、熟すとそのまま実になる。

【海岸線の今昔】 アコウがどこにあるか分かるかな？



メモ 📝

4 松地区



松集落は、大きく崎舞・奥内・音地・西舞の4地区にわかれる。

松山や八幡浜へ行くには「つんごえ道」を通り伽藍山から三崎へ抜けるルートを使っていた。二名津から名取へ向けての山越えルートもあったが、名取では舳(はしけ)で本船に乗り移らなければならないのでほとんどの人は三崎まで出ていた。

当時は、八幡浜へ行くより別府へ行く方が何かと便利だった。

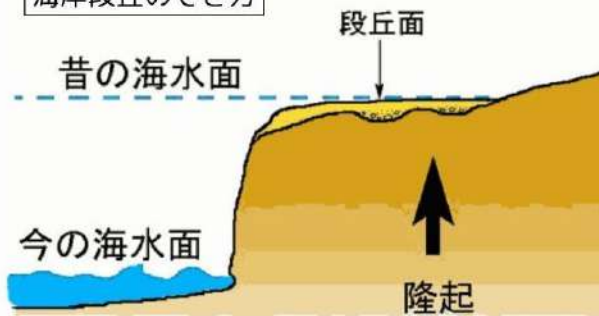
また、前之浜港の奥に松集落の三二四国八十八ヶ所一番札所がある。

●地形の特徴

集落は、海抜60m～100mまでの海岸段丘の上に配置し、中央に前浜川が流れ、川を挟んで上流の東側に天満神社が、西側に聚楽庵が位置し、そこに隣接する高台は墓地となっている。集落が密集している場所は、天満神社の下、中塚橋周辺で商店などが建ち並び賑わいを見せていた。

集落から海岸へ降りると、昔ながらの民家はない。海岸段丘の下は扇状地は狭く、水の確保が容易ではなかったことが原因と考えられる。

海岸段丘のでき方



メモ 📝



●川と水場

伽藍山の恩恵で水が豊富にあり、15～20軒に一つは水場か井戸があった。南予用水ができるまで生活用水は、これらの水場や井戸に頼っていた。

その他、仁田之浜やクジラ浜に流れる川からポンプで水を供給していた。

また、つんごえ様の西(ヤナギモト)に湧き水があり、ここから「ヒラノヤマ」に設置したタンクに水を引き、最初は飲料水としていたが、後に防火用水とした。



●港・船倉

自然木にトタン屋根で「納屋(ナヤ)」とも呼ばれており、多い時には30軒の船倉があった。

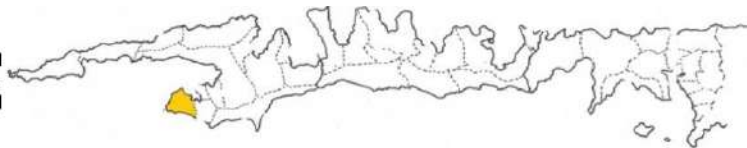
船は、漁だけでなく、畑への移動や薪を取りに行くのに使った。陸路に行くより効率的な交通手段だった。

船倉の前面は、船を台車等の道具を使わず直径40～50cmほどの緑色片岩の礫の上を滑らせていたことから「スベリ」と呼ばれていた。現在は、コンクリートで固めているところがほとんどで、昔のままの姿が残っているのは大変貴重である。



メモ 📝

5 井野浦地区



ムーンビーチ井野浦キャンプ場

300mにわたる海岸線が広がる三日月型をした人工砂浜。白い砂浜と青い海のコントラストが美しく、夏は海水浴とキャンプが楽しめる。

阿弥陀池

かつて三崎湾に面していた入江が、砂州によって閉じられてできたラグーン(潟湖)。コイやウナギなどの淡水魚が生息し、それを狙うミサゴなどの鳥類も見られ、豊かな生態系が形成されている。

阿弥陀池に残る竜王伝説

かつて大島からやってきた竜王が、この池を手に入れようとして失敗。竜王は怒って大島に帰ったが、その間ずっと雷雨が止むことがなかった。村人は、竜王が再びやって来ない様にと阿弥陀如来を祀り、それが池の名前の由来とされている。

阿弥陀池で見られる動植物

【スイレン】

優しい色合いと優美な花姿で幻想的な雰囲気の花で6月が見頃。

画家クロード・モネがこよなく愛した花でもある。

【ミサゴ】 英名：オスプレイ

鳥綱タカ目ミサゴ科ミサゴ属。魚を好んで食べることから「ウオタカ」、捕らえる時の水音から「ビシャゴ」と呼ぶ地域もある。



メモ 📝



6 名取地区



1615(元和元)年、宇和郡10万石の領主となった伊達秀宗が、仙台からの家臣を供に入部した際、馬数十頭の荷駄で諸道具を運んできた。その馬をひいてきた宮城県名取郡の人々を移住させ、馬の放牧をさせたことが「名取」の地名の由来という説がある。

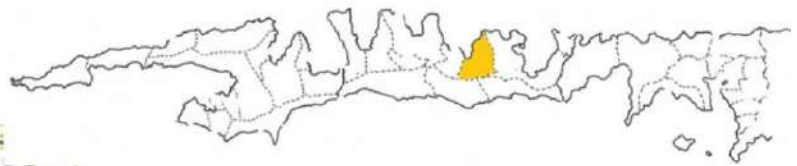
また、宇和島藩は名取を軍馬育成の地にしたと伝えられているが、九州勢の侵攻に備えた見張りの地にしたのではないかという見方もある。

名取は、標高約100～150mの斜面に位置しており、家や畑を作るため石を高く積み上げて集落ができた。

この地域は、佐田岬半島では珍しい白い石「石灰質片岩」の出る地層で石垣にも大理石が混じり、また石垣の積み方にも工夫が凝らされており、野良積みや平積み、矢羽根積みなどの技法が用いられている。その結果、石垣は多彩な表情を見せ、独自の文化を形成し、独特の景観を成している。



7 大江地区



●大江地区の概要

佐田岬半島の瀬戸内海に面しており、図①・写真①のように標高20～70mの海岸段丘場所に発展している。

海岸段丘は、更新世(206万年前～1万年前)に形成された段丘面で、隆起に伴い海面下にあった平坦地が陸化したもので先端部は段丘崖という。(図②)

集落の南側に中世石造物群(土井、大川)をはじめ客神社、集会所(瑠璃洗庵)、組頭屋敷など中近世の中心的役割を果たしていたことが推測される。

港湾施設は、北側にあるが周辺に集落はない。

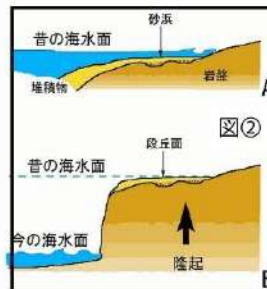
●水理

水源は東側後背の権現山からの河川に頼っている。これら河川は、比較的水量が多く段丘面の固い岩盤を掘り抜くような井戸に頼る必要はなかった。

一方、アメリカから水道技術を持ち帰った高野宇平によって早くから簡易水道が布設され、2ヶ所でレンガ造りのタンク(水槽)が残されている。集落南の道端に濾過水タンクが1基残されているが現在は使用されていない。(写真②)

集落北東の山中(標高100mのところ)には取水タンク、濾過水タンク、給水タンクが揃い現在も使用されている。

※『佐田岬民俗ノート2』 - 117ページ参照



●地質

大江湾奥の南端に2段の正断層を見ることが出来る(写真③)。

緑色片岩と泥岩の互層だが、緑色片岩層は風化しさらに破碎されている。泥岩層の固結の状態は悪く風化も進み脆くなっている。これらの地層は、西側では北に沈み込み固結状態も良好になっている。

写真③



メモ

●中世石造物、近世石造物

中世石造物は、大江地区の南側に集中している。

土井には、円礫状の緑色片岩を積み重ねた上に石塔を配置するなど中世墓の形態を残した石造物があり、その造立時代は、14～15世紀で、石材は愛媛県産の凝灰岩と大分県産の角閃石安山岩であると考えられる(写真④)。

大川には、16世紀～17世紀初頭の花崗岩製・凝灰角礫岩製・角閃石安山岩製の五輪塔や一石五輪塔がある(写真⑤)。



写真④



写真⑤

近世石造物は、集会所(瑠璃洗庵)付近に集中している。

入り口にある緑色片岩製の側面を五輪塔形に加工した板状五輪塔(写真⑥)や、墓所にある馬頭観音石仏(写真⑦)は、特に珍しいものである。



写真⑥



写真⑦

●耕作地

弐豎截(いちのきり: 宇和島藩内の租税台帳)寛文検地によると、田地は、三机浦の内本浦(今の三机)、小島に次ぐ面積となっている。集落南側の水量豊かな河川と、これにより形成された扇状地で稲作が盛んに行われ、近隣の三机本浦に輸送していたことが容易に想像できる。

※22.弐豎截 参照

メモ

8 塩成地区

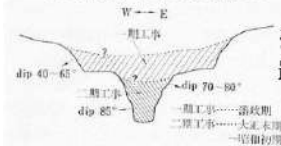


●塩成堀切

関ヶ原の戦いの功績により、伊予宇和島藩初代藩主となった富田信濃守信高が海運の便宜を図るため、三机-塩成間を掘削し、慶長15年(1610)、運河を切り開く工事を始めた。

藩内から人夫(延べ10万人)を集めて掘らせたが、結局開通することとはなく、慶長17年(1612)に中断。

その後、大正末期に5~10m掘り下げられ、現在の道路になった。



※佐田岬半島：全長約40km、最大幅2km、最小幅はこの塩成峠付近で0.8kmであった。

●供養様

堀切の工事で犠牲になった人や工具などを納めたとされる祠。「クエサマ」とも呼ばれ、町指定史跡となっている。

●要橋

さくら川(通称 大川)にかかる橋。

特徴は、大きな青石(緑色片岩)を両岸から巧みに積み上げ、上段を少しずつ迫り出させることで連結させ、上部に天井石と砂利を敷いたとても珍しい構造。

昭和30年頃に連結部の石が一部崩れたが、近隣住民が海岸から砂を運びセメントで補強したため、現在では橋の下から当時の石組を見ることができる。

要橋	明治四辛	世話人	銘文
未八月	鍛冶	石工	
	田中	三好	
	阿部	源太	
	中藤	七郎	
	吉	治	

○要橋石碑(伊方町塩成)

※『佐田岬民俗ノート1』より



●他の石橋との比較

鹿児島県の石橋	精錬所跡	萩市 落合の石橋	塩成の要橋
アーチ型石橋		刎橋	

・石の刎橋(はねばし)：両岸から石材を斜めに刎ね出し、その上に橋桁を載せる構造の橋で、九州地方や中国地方に多く見られる。

※日本三奇橋の1つとして知られる山梨県大月市の猿橋は木造刎橋。

●慰霊塔

1949(昭和24)年6月に猛威を振るったデラ台風により、日振島漁船48隻(328名)が遭難し、その供養のため1953(昭和28)年に建立された。



メモ

Q.堀切工事は意味があったのか?

Q.もし、運河が完成していたら?

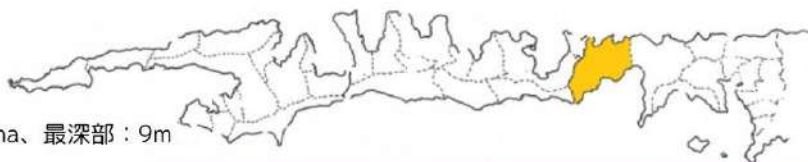
9 亀ヶ池

※周囲：約2km、面積：13ha、最深部：9m

亀ヶ池は「加周池」とも呼ばれ、深い入江の湾口に長年の土砂堆積によって形成された愛媛県内最大のラグーン(潟湖)である。

1596～1614年(慶長期)には入海だった記録があり、1684(貞享元)年完成の『式墅載(いちのきり)』には、「一役水主拾人(中略)内三人ハ加周御池之新網為御用指引。」との記載がある。

「新網」は、イワシを獲る網漁を指すと考えられており、かつてこの池が海とつながっていたことを示している。



亀ヶ池周辺MAP

～周辺を探索して、オリジナルMAPを作ろう～



10 二見地区



「フタミ」とは「フトウミ」の意で、海神を敬った言葉。

「二見」という地域名の由来は、伊勢の二見浦の景観に似ていたことからという説と、伊予灘と宇和海の二つの海「フタツウミ」または「フタミ(二身)」の意味からくるという説がある。(『伊方町誌』より)

宇和島藩が統治した時期から二見浦と呼ばれており、宇和海側にあった「二見」・亀ヶ池周辺の「加周」・「田之浦」・「古屋敷」・瀬戸内側の「大成」・「鳥津」の6集落が合わさり現在の二見になった。

【鳥津集落】

1867(慶応3)年、鳥津茂市が漁場を開拓して、移住したことで開かれた集落。

○地形の特徴

集落の中心部を流れる鳥津川は、急峻なV字型の谷を形成し、水深の深い全面海域に流れ込んでいる。集落は海拔30m以内の狭い扇状地に集中し、扇状地の縁に石垣を築いて平場を広げ集落を築いている。

鳥津川は、田圃に供給する必要水量を確保することができ、扇状地とその周辺には段々畑を作っている。

鳥津地区は、九町越の境までの土地があり一部を耕作地としている。一方、海岸段丘は、大江地区のように居住地、耕作地などには活用されていない。

○生活用水

中組、奥組、東組という3つの「什人組」があり、それぞれが管理する共同井戸がある。これらは、1960(昭和35)年に簡易水道が完成するまで生活用水として使用されていた。

扇状地を流れる河川は、鳥津川1本のみで集落の入り口付近に3本の支流があり、この周辺には井戸はない。河川からの水源をコンクリート製のタンクに貯水して生活用水としていた。

○鳥津茂市(旧姓：鳥居) - 漁場の開拓

- ・1863(文久3)年：鳥津で麻の蚊帳で罟大網を作り、漁を行う
 - ・1866(慶応2)年：私財を投じて波止を築造し、漁場を開く
 - ・1867(慶応3)年：鳥津に転居
 - ・漁場を拓いた功績がたたえられ、二見庄屋より名字を「鳥居」から「鳥津」に改めた
 - ・移住民が徐々に増え、鳥津網元として中心的な役割を果たした
- ※什人組による「おこもり」(念仏講や琴平講など)があり、集落の結束は強く、現在も続いている。



網元の船倉

※季節風の影響を受けやすいため
防潮フェンス・石垣がある



メモ 📝

【大成集落】

1841(天保11)年、古田仙右衛門が漁場を開拓し、移住したことで開かれた集落。

○地形の特徴

鳥津同様、海拔30m以内の扇状地に集落や畑が密集しており、東側には、小河川があり海岸近くに僅かながらの田圃があったらしい。

西側は、東側に比べ季節風の影響を受けにくく、平地も多いため集落数も多い。

海岸は、緑色片岩の礫浜に岩層が露出している。

○生活用水

大成では、河川のことを「タネ」と呼んでいる。

鳥津同様に、東側にある河川が集落に流れ込む場所に水タンクをもうけて生活用水としている。

井戸の数は多く、網元はもちろん、所々の家の庭などに残されているが、現在はほとんど使用されずマンホールの蓋で閉塞されている箇所が多い。



古田仙右衛門 開拓記念碑

○古田仙右衛門 - 漁場の開拓

- ・大成に注目した古田は、独自に漁場開拓を計画。
- ・1838(天保9)年：大成に移住し、私財を投じ防波堤を築き始める。風波が強く、人夫も逃げ出すほど工事は難航を極めたが、3年4ヶ月をかけて完成させた。
- ・網元として、大成湾の西側湾頭に館を構える。

○網漁以外の事業

西側の浜には、揚浜式と思われる塩田跡や鰯を湯がいた釜跡なども残っている。

また、防波堤内では、フカの生け簀など網漁以外の事業も行っていたと考えられる。



塩田跡



南北朝～室町時代の五輪塔群



鎌倉時代の五輪塔のパーツ

○漁場開拓以前の「知られざる島津・大成」

島津・大成とも、島津茂市・古田仙右衛門らが開拓する以前の文献などは残っていない。

しかし、共同墓地には南北朝時代～室町時代や鎌倉時代の五輪塔のパーツが集められており、五輪塔の石材(阿蘇溶結凝灰岩)から、中世にはすでに九州との交流があったことがうかがえる。

メモ

11 佐田岬半島の地質

1. 四国の地質

四国の地質区分は北から以下のように列状となっている。

①領家帯

白亜紀(1億4500万年～6600万年前)に大量のマグマが上昇し、ゆっくりと冷え固まって花崗岩などの深成岩になり、その後、隆起と浸食によって地表に現れた。

②和泉層群

後期白亜紀、中央構造線の左横ずれ断層で沈降した海盆(地層のくぼみ)に堆積した地層で、海底で堆積した礫岩、砂岩、泥岩などからなる。また、二枚貝や巻貝などの化石が多く産出する。

③三波川変成帯

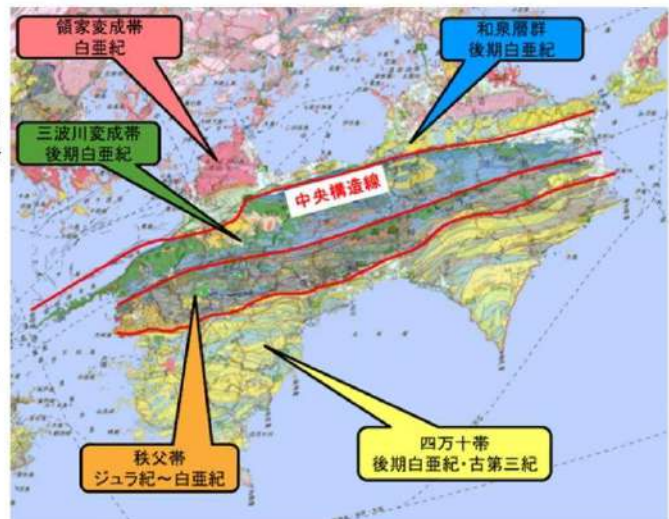
後期白亜紀(約9000万～7000万年前)に地下15～20kmの深さで変成作用を受けて形成された結晶片岩からなる地質体。特に佐田岬半島では、この変成岩が薄い層を成した板状の石板として多く見られる。日本で唯一、変成岩だけで貫かれた半島であり、この地域特有の景観を形作っている。

④秩父帯

ジュラ紀～白亜紀(2億年～1億4500万年前)の地質体で、石灰岩、珪岩、砂岩、結晶片岩などからなる。オルドビス～デボン紀(4億8500万年～3億6000万年前)の岩石からなる黒瀬川帯という地質体を挟んでいる。

⑤四万十帯

後期白亜紀～古第三紀(1億年～6600万年前)の地質で、主に砂岩や泥岩からなる。



2. 中央構造線と瀬戸内海の景観

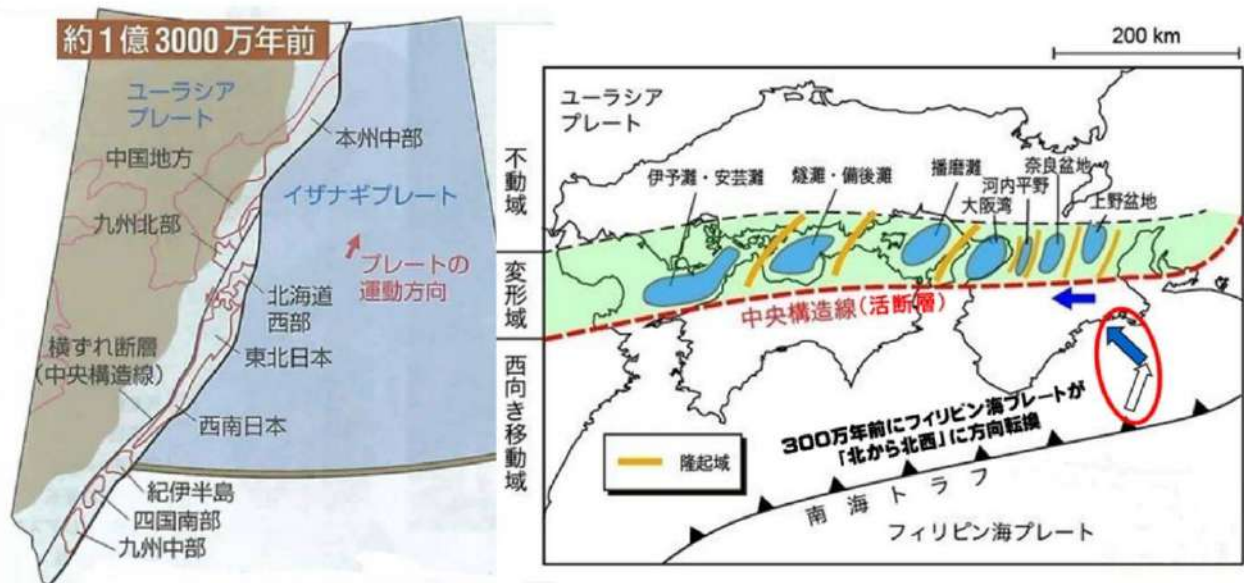
①日本列島は、ジュラ紀のプレート沈み込みによってアジア大陸の東縁に付加体として形成された。

②1億3千万～1億年前の白亜紀にイザナギプレートと呼ばれる海洋プレートが、中国南部付近にあった島を移動させ、中国北東部に衝突させた。

③この時にできた左横ずれ断層が中央構造線(古い中央構造線)である。

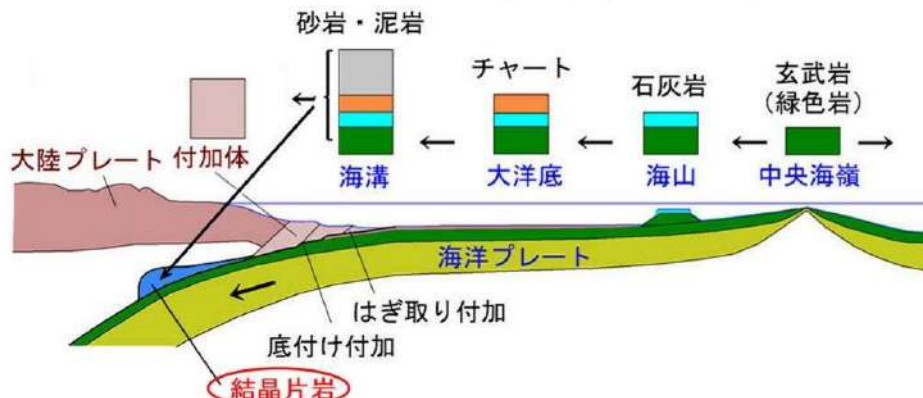
④300万年前、フィリピン海プレートは、太平洋に押されそれまで北に向かっていたが、北勢方向に向きを変え、右横ずれ断層(活断層)となった。

⑤フィリピン海プレートが方向を変えたことで、瀬戸内海に歪みが生じ、島と灘ができた。



3. 佐田岬半島で見られる岩石

佐田岬半島は、付加体が地下の深い所で高い圧力を受けて(変成作用)できた結晶片岩できている。



①緑色片岩……………玄武岩などの火成岩が、比較的低温・低圧の環境で変成作用を受けて生成された岩石。佐田岬半島で採れる緑色片岩は「伊予青石」とも呼ばれ、石垣や石碑などに利用されている。

また、室之鼻海岸では、水中で形成された枕状溶岩も見られる。

②黒色片岩……………海洋プレートに堆積した砂岩や泥岩が変成作用を受けてできた黒色の岩石。石墨(鉛筆の芯の材料)を含むため黒く、片理が発達しており、薄く剥がれるように割れるのが特徴。

また、白くキラキラ光る部分は絹雲母によるもの。

③珪質片岩……………深海で堆積したチャートを原岩として変成を受けた岩石。体積の90%近くが石英のみからなるため、非常に硬い。

④石灰質片岩……………石灰岩を原岩とする白色の岩石で、大半が方解石から構成されているが、これが必須の条件ではない。名取地区などでは石垣に使用されており、緑色片岩との相互層も多く見られるのが特徴。

⑤変ハンレイ岩……………中央海嶺やホットスポットの地下深部でゆっくり固まったハンレイ岩が変成作用を受けて生成された岩石。

有色鉱物が、変成によって緑色に変わっているのが特徴。



メモ

12 佐田岬半島の石垣たち

くらしの中のあちこちに

佐田岬半島のくらしにおいて、石垣は不可欠な存在だった。平野が少ないこの地域に石垣を築くことで、傾斜地に住宅や畑を造り、新たな道を開拓することが可能となった。

さらに、年間を通して吹く強風や潮風に備え、大規模な石垣が作られ畑や納屋・井戸・お地藏様なども石で囲まれた。

これにより風や潮風から守られながら、地元の人々は安定した生活を営むことができた。



①野坂の石垣



②ヘイカサ(串)



③子安観音



④高神様



⑤石で築いた波止



⑥小学校グラウンドの防風石垣



⑦石垣で囲われた納屋



⑧60mの石垣とレンガ塀



⑨井戸と水神様



⑩石垣とお地藏様



⑪石垣と鳥居



⑫石垣に囲まれた畑



⑬石のトンネル

つぎ方のいろいろ

石垣を築く(石を積む)ことを「つく」といい、その方法は千差万別。地形や石材の形に合わせた様々なつき方がされている。中には、再現不可能と思われるほど絶妙につかれた石垣も見られる。



ヒラ積み(ベタ積み)
平たくつく。



タテハ
矢羽根状につく。



落としづき
斜めに巧みにつく。



乱れづき
大小の石を巧みにつく。

石の形もいろいろ



角ばった石
山から切り出した石。各地に「イシヤマ」と呼ばれる採石場があった。



丸みのある石
海岸や河川などで採れた石。海に近い集落に多く見られる。



小さい石
畑の周囲で多く見られる。開墾中に出た石を利用したのだろうか？



立てた石
石を立てることで石垣の高さを稼いだ。水田だと水が温まり、稲が良く育つそう。

佐田岬半島 岩石のいろいろ



碧い石
俗に「アオイシ(青石)」と呼ばれる「緑色片岩」。佐田岬半島のほぼ全域で見られる「佐田岬ブルー」の基。



白い石
名取地域を中心に見られる「石灰質片岩」。



黒い石
泥岩が変成作用によってできた「黒色片岩」。



赤い石
「赤鉄鉱紅れん石石英片岩」。瀬戸内海側などで極稀に見付けることができる。

メモ 📝

13 三崎精錬所

今では想像もつかないですが、佐田岬半島では明治以降、100以上の銅鉱山が稼働していました。一攫千金を夢見た山師たちがあちこちに出現！やがて探掘された銅鉱石から銅を取り出すための製錬所が作られたのです。
そのひとつが「三崎精錬所」なのです。

佐田岬半島は銅のかたまりだった!?

夢とロマンが詰まってる!?

※明治39年愛媛県統計書より
1906年の愛媛県内の銅鉱山は83ヶ所
そのうち44ヶ所が佐田岬エリア

三崎精錬所前の海岸。製錬で出る「煙」が散乱する異様な光景が広がる。



三崎精錬所のおいたち!

三崎精錬所の誕生!!

1890年、それまで各鉱山でやっていた製錬を、一か所に集めて製錬してよいという決まりができて、各地に大規模な製錬所が作られました。佐田岬半島周辺では、佐島製錬所(1893年)、女岬製錬所(1897年)に続いて作られたのが、1900年創業の三崎精錬所なのです。創業者は「伊予の銅山王」と呼ばれた矢野三郎[1867-1925]。まさに時代の要請に応えて生まれた産業施設でした。

地元住民の襲撃!!



倒れた煙突の跡

銅は製錬する過程でたくさん煙が発生します(3P参照)。日露戦争での需要で銅を増産していた時期、周辺への煙の害がピークに。約100名の地元青年が深夜に製錬所を襲い、焼窯35個のうち、33個を壊したという記録が残っています。

銅価暴落!→閉鎖!!

1903年に地元住民と矢野三郎との間で和解契約を取り交わし、1907年に明治製錬株式会社と合併。2座の高炉を建設しますが、銅の価値が暴落し1908年春には操業を中止しました。



薄く平たい石を積み上げた焼窯群

佐田岬半島の銅業関連年表

- 718年 養老2年
出石鉱山:この年、大地震動して発見されたと伝えられる(『四国鉱山誌』268p)。
- 1714年 正徳4年
日土村の今出銅山の探鉱を、以前から申請のあった大坂和泉屋(住友)吉左衛門に請け負わす(『伊達家御歴代記事』)。
- 1858年 安政5年
薩摩藩士田原直助(明章)「宇備出産考」まとめる。
- 1860年 万暦年間
伊方浦妙楽寺の佐々木玄達、日土・磯崎の山で鉱脈を発見、後に住友から資金調達して探鉱。(『伊方町誌』)
- 1864年 文久4年
宇和島藩家中三浦某が片河銅山を視察、『八組探遊記』に記す。
- 1873年 明治6年
「日本坑法」布告(大政官第259号)。鉱物の試掘・探掘が許可制となった。
- 1890年 明治23年
「鉱業条例」(法律第87号)が制定される。買鉱製錬所設置が認められる。
- 1893年 明治26年
佐島製錬所設置。
- 1897年 明治30年
女子岬に製錬所設置。(『日本鉱業誌』)
- 1900年 明治33年
三崎童子鼻に製錬所設置。(『三崎町誌』)
- 1905年 明治38年
「鉱業法(旧鉱業法)」(法律第45条)が制定される。
- 1950年 昭和25年
「鉱業法(現行法)」(法律第289号)が制定される。租鉱権制度が創設される。
- 1965年 昭和40年
高浦鉱山閉山。佐田岬半島の銅業の火が消える。

銅鉱石から銅を取り出すまで



通常、金属を取り出す行程は「製錬」と書きますが、「三崎精錬所」の場合は登録文化財の正式名称にあわせています。

このうち、焼鉱から荒吹に至る工程を三崎精錬所で行いました。

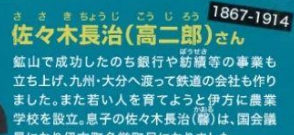
メモ

この時代に活躍した佐田岬の偉人たち



高橋新吉さん

1901-1987
詩人。ダダイズムや洋などの影響を受けて独自の詩の世界を作りあげました。生い立ちを書いた小説「ダガバジジギ物語」の中で、新吉が4歳からの2年間、父親が三崎精錬所に勤めていて、その自宅の庭にあった道具で遊んだことについています。



高橋新吉さん

1901-1987
詩人。ダダイズムや洋などの影響を受けて独自の詩の世界を作りあげました。生い立ちを書いた小説「ダガバジジギ物語」の中で、新吉が4歳からの2年間、父親が三崎精錬所に勤めていて、その自宅の庭にあった道具で遊んだことについています。



高橋新吉さん

1901-1987
詩人。ダダイズムや洋などの影響を受けて独自の詩の世界を作りあげました。生い立ちを書いた小説「ダガバジジギ物語」の中で、新吉が4歳からの2年間、父親が三崎精錬所に勤めていて、その自宅の庭にあった道具で遊んだことについています。

三崎精錬所MAP

小さな谷状の地形にさまざまな施設跡がそのまま残っています。

